

垂水史談会報

第 57 号
2024 (令和 6) 年
6 月発行

【報告】

令和 6 年度

垂水史談会総会を開催

4 月 28 日 垂水市民館

4 月 28 日 (土) 13 時半より垂水市民館にて、令和 6 年度総会を開催しました。

町田猛会長のあいさつ
の後、令和 5 年度の経過報告と決算報告を承認。そして令和 6 年度の年間計画案及び予算案が原案通り承認されました。また令和 6 年度は垂水史談会が復活して 30 年目に当たることから、各種催しを検討することも確認されました。

総会終了後は、かごしま

探検の会代表の東川隆太郎氏による講演『地形地質から見つめる垂水の歴史』を市民の皆様

に開放して開催しました。今年度も史談会会員の協力のもと、ともに頑張っていきたいと思います。



令和 6 年度役員は次の通り。

会長・町田猛、副会長・川崎あさ子、
事務局長・瀬角龍平、理事・山田義之、
隈元信、古場昌彦、新原清実、中谷潤
心、監査・阿世知好子、前田和江、顧問・町田洋一、伊集院統



— 垂水史談会復活 30 周年記念 —

『北迫正治』原画展を開催

五月中 市立図書館

市立図書館に於て垂水史談会復活 30 周年を記念した『北迫正治』原画展が開催されました。

北迫さんは昭和 23 (1948) 年に垂水で生れ育ちました。鹿兒島大学 2 年生のとき、ラグビーの試合中に頸椎(首の骨)を損傷してベッドに寝たきりの生活になりました。そんな境遇のもとで、寝たままでもペンを口でくわえて文字や絵を描くことに挑戦し、たくさんの作品を残しました。

今回で五回目の展示になり



ますが、12 日(日)には午後一時半からギャラリートークを開催しました。葛迫幸平氏の軽妙なトークと参加者の感想を交えながら、北迫正治氏の心情に迫りました。今回も市内外から多くの方々が来場されています。

(アンケートの中から)
「亡くなられてから 13 年経過しているのですが、時折、君の誠実な人柄をいつも思っています。母や兄弟、子や妻ら、君から学んだことが脈々と生きています。ありがとうございます。(71

歳以上・南九州市)」「見るたびに心が洗われる気がします。(51歳以上・垂水市)」「前から聞いたりして尊敬する方の一人です。荒崎パークキングでもプレートを見たりして、北迫様を忍んでいま



す。もったいない方だっと思う反面、私たちに前向きに、一日を大切に生きることを教えてくださっています。有難いです。(71歳以上・曾於市)」「ただ感動の一言です。なつかしい高校のラグビーの先輩の写真も見れて感激です。(71歳以上・霧島市)」「私は S39 年卒(鹿経大)です。ラグビー部でした。新聞の「ひろば欄」を見て、ぜひ行きたいと思

い来ました。同じラグビー仲間として、事故後よく頑張ったと思います。鹿兒島市内でもぜひ原画展をしてください。(71歳以上・鹿兒島市)」「詩画集の言葉も心にしみました。原画はやさしさのある絵で素晴らしいかったです。(31歳~50歳・東京)」「うちにあるものを生み出し、表現する力は限りないエネルギーとなり、命の支えとなると思えました。何回拝見しても心動かされます。(51歳~70歳・垂水市)」「いつも笑顔だった北迫さん。懐かしいです。たくさんの勇気をもらいました！(31歳~50歳・熊本市)」
— 以下、割愛 —

大正三(一九一四)年の桜島大噴火から二二〇年

『垂城史談』第二号より

消防逸話 ③

上川床久

避難民の間には盛んに流言蜚語伝わり、「今に桜島は海中に陥落し、為に大海嘯が襲来する」と言いふらし、海潟部落民も殆ど山へ山へと避難し去りては、流石の消防手等も一身一家の上を思いを馳するの心、漸くに兆し、寂寥恐怖の念、交々至り、或る者は恐怖の余り、顛倒気絶するに至り、返って保護を要する者さえ出で、一人去り二人行きて、第二回目の出船を拒まんとする気配すら窺われ、島人残留者に対する救助の約束も危ぶまれんと見て取るや、君は他の組員を顧み、大声叱咤し「有村には小学校長が畏くも御真影を奉戴し参らせ居るではないか。逃れんとする者はこの櫓を以て殴り飛ばすぞ」と大上段に櫓を振り冠りたるため君身体矮小なりと雖もその氣勢に辟易し、再び残留避難民を救助す



べく、天神ヶ浜を漕ぎ出したり。

櫓の動きも忙しく沖に漕ぎ出れば溶岩の噴出、降灰の量は更にその度を増し、焦石、舟の前後左右にシュツ、シュツと怪しく響きて落下し、時折り、船の舷を掠めて救護員の心胆を寒からしめ、凄惨その極みに達して幾度か、後へ返さん、との動議起こりしも、君の義勇奉公の精神は鉄石よりも固く、「死なば桜島の人々と一緒だ。いま一息だ、辛抱してくれ」と同僚を督励し、小一時間を要して漸くに万難を冒して、有村海岸に漕ぎ付け、直ちに上陸し、君は残留者を此処彼処と搜索し、部落民三十余名を救助船に乗せたり。

然るに其のうち、真の愛馬家と申すべきか、三十二、三歳くらいの青年ありて、馬をも舟に乗せくれと嘆願するを以て、君は舟小にして馬を乗せるにおいては沈没の虞あるにより、同青年に對い「お前は命が欲しいか、馬が欲しいか、斯様な小さな舟に馬まで到底乗せられぬから馬は置け」と戒めしに、彼の青年は悄然として「私はそれなら馬と一緒に死にましよう」と口綱を取りたるまま、舟に乗る気配なきを以て、君は狼狽の中にも痛く同情し「然らば仕方なし、昔から馬はよく泳ぐということを知れ。お前は船の上から口綱を取れ、そして馬を泳がせよ」と。突差の間に機転を利かしたる処置に出でたるため、同青年は九死に一生を得たりとばかり、君を俯伏して拝み、舟に乗り込み、君は全部の島民を乗り込ませ、またしも疲れ果てたる体に擦りかけ、救世主のごとく、職務の前には生の執着もなく、幾多の危険を冒して、午後四時半ごろ、身体綿のごとくに疲れて、無事天神ヶ浜に漕ぎ付き救助の責任を果たし、直ちに協和小学校に至り、役場書記・米田豊武並びに今井巡査に報告、救護所へ収容したり。

救護所においては桜島より泳ぎ渡りて人事不省に陥りしもの数多ありて村山、林両医師、応急手当をなすも助手の不足を訴うるに、君は付近の隣家より藁を運び来りて火を焚き体を温め、或いは砂糖水を口に含ませ、介抱至らざるなく、親身も及ばぬ懇切な取り扱いをなし、全部の避難民蘇生するを待ちて、夕暮れに至り君は田神松原の自宅へ帰り見れば、垂水村民も殆んど避難し、町の家々は門戸を固く鎖し、電灯は消え稀に犬の遠吠えと、巡邏する警官の佩剣の音のみ聞こゆる表現し難き寂寞の中を、家族の安否如何と気遣いつつ漸く本城川の上方、岡崎鼻の松山に避難し居る由を人伝えに聞きたり。

妻のニカは幼児二人を抱え、僅かばかりの家財を取りまとめ、岡崎の松林に荒席を延き、一本の蠟燭に火を点し、芝生の上には香を焚き、一家眷族寄り集まり、妻ニカ子眼も泣き腫らして号泣しつつあり。同じく避難民も君の再び還らざるものと信じ、弔意を述べ、悲嘆に暮れつつありしを、漸くにして尋ね当てる君は不審を抱き、何事なるかと妻に問えば、妻ニカは君の生き帰りしを喜びの余り、夢にあらざるやと狂奔したる悲喜劇を演じ、しばしかわす言葉もなかりしという。

気静まるを待ちて事の次第を問うに、救助より帰りし同僚が、君の妻子に伝えて曰く、安楽金助君は小舟から桜島に渡つたから彼の焼石の落ち具合では到底生きて帰ることは出来ぬ、もう桜島で死んだらうと。之を耳にした妻子は既に死亡と思ひ込みたるものと判明した。君は馬鹿など唯一言、苦笑に紛らし、夕食を認めて、更に妻子や隣人の注意には耳をも藉さず、疲労の極みに達せる体を励まして、再び町に帰り、警察官の補助として自発的夜警に従事したり。



同夜、草木も眠る午前零時、君は自宅の雨戸一尺あまり開き居るに不審を抱き、家屋内を調べると、こはそも如何に、屋内の侵入者は君が昼間、死を賭して救助したる東

桜島の五十余りの老婆にて味噌を盗み取り屋内より逃避せんとする処なりし。

君は言葉優しく「お婆さん、貴女は無断で斯かることをなさるな、然し、さぞや貴女もお困りならん」と且つ戒め且つ労り、箆筒より二枚の古裕を取り出し、更に米一枬を与えて「不自由の際は何時でも差上げるだけ差上げますから」と述べれば、

彼の老婆は君の同情心に嬉し泣きに泣き崩れ、「昼間命を拾ってくれたお方とも知らず、面目もございません。今まで私は消防手はただ火消人夫と思つておりましたが、消防手は神様です、仏様です、神仏の化身です」と伏し拝み、爆発騒ぎも忘れたるが如き場面を現出したり。その後、老婆は君と会うごとに神仏のごとく崇拜し、世間へ之を吹聴したりという。

君が爆発に際し、率先決死的活動をなし多数の人命を救助したる壮挙は鬼神を泣かしめ、懦夫を起たしむるに十分たり。その功績や実に一般消防手の亀鑑とするに足る。時の本県知事・高岡直吉閣下は之を殊勝とせられ、大正三年九月十八日、賞金五円を贈り万民の亀鑑として表彰せられたり。男子として消防手として本懐に過ぐるものあらんや。

君は明治廿四年二月廿七日、垂水村田神三七六番地に生まれ、若年にして義勇奉公の精神に燃え、既に明治四十四年二月廿七日、垂水村消防組二等消防手を拝命、大正九年七月廿一日、一等消防手に進級。爾来二十余年一日の如く、警鐘の響きを耳朶にせば、何処にありても時を論ぜず常に第一着に駆け付く。如何なる困難にも堪えるは人の知るところなり。浮薄の徒、時に馬鹿正直と酷評し、軽視しつつあるも、君の終始一貫せる堅忍不拔の精神とその発露たる功績は、実に消防逸話の一節を飾るに充分たり。

(終わり)

(原文の旧字、旧かな遣い、略字等は当用漢字や現代かな遣い等に改めた。また、現在では不適切と思われる表現等についても、歴史資料としての観点からそのまま表記した・事務局)

―たるみず春秋―

春雷や巢立ちの部屋を写し撮り

川井田登美子

春雷は春の到来を告げる雷鳴であるが、稲妻や雨も伴う荒つぽい春のこと触れた。

この作品は、春にふるさとを旅立った子供の部屋だということが想像できる。子供の居なくなつた部屋にたたずむと、突然雷鳴と共に稲妻が部屋を写真のフラッシュを焚くように映し出す。春雷は、子への思慕を断てと言っているようにも思えるのだ。

(季語：春雷・春)

(文章：瀬角龍平)

